

現代における老いと死と癒し

新 井 俊 一

1. はじめに—私の論点

「現代における老いと死と癒し」という題をいただいてから、かなり苦しみながら考察を重ねてきた。このテーマについては様々な観点から話すことが可能であるが、私は浄土真宗本願寺派の僧侶として、この問題を考えていこうと思う。本稿の趣旨は以下の通りである。

老いと死を考えることは、生を真剣に考えることである。死を考えないものは、生をおろそかにしていると言ってよい。私たちは人間として生まれたおかげで、命に目覚め、命を感じ、命を味わうことができる。老いは命の味わいを深める期間である。死は命が最高に成熟するときであるとともに、より大きな命に回帰するときである。

2. 癒し (healing) とは何か

私達が病気になったり怪我をしたりすると、完全にもとの状態に戻ること、すなわち、治癒 (cure) することを願う。しかし必ずしももとの状態に戻るとは限らない。特に重度の病気や怪我をすると、以前と同じ活動能力を取り戻すことが不可能な場合が多い。この場合、多くの人には以前の状態に恋々として落ち込みがちである。その時に、自分の新しい状態を完全に受け入れられるだけの大きな器に成長して、そこから新しい出発をする—これが「癒し」の意味であると私は理解する。以下に「癒し」の例を検討してみる。

パリー語の仏典に釈尊の女性弟子キサー・ゴータミーの話がある。彼女は、コーサラ国の首都サーヴァッティの貧しい家に生まれた。年頃になって嫁に行き男の子を出産した。ところがその子は歩き回るようになった頃に、突然死んでしまった。気が動転した彼女は亡骸を抱いて、家ごとに薬を求めて歩いた。不憫に思った人が彼女に釈尊のところに行くように言った。釈尊は彼女に、町に行って、まだ一度も死人を出したことの無い家から、芥子の粒を貰って来るように、と言った。キサー・ゴータミーは、家々を廻ったが、そのような家族は一軒もなかった。そうしているうちに、彼女に釈尊の伝えようとしていることがわかってきた。悲しみを胸にこめて、彼女は我が子を茶毘に付して、釈尊のところに戻った。そして、キサー・ゴータミーは釈尊の弟子になり、証りの域に達した。^(注1)

この話では、キサー・ゴータミーが各家を訪ねて芥子の実を求め、何度も挫折を味わう過程において、彼女の心の中に大きな変化が起こってくる。すなわち、死は誰にも避けられない事実であり、誰でも肉親の死の悲しみを心に懐きながら生きていることを実感するに至る。そして子供の死が受け入れられなかった根本の原因が自我への執着であったことに目覚め、最終的に子供の死を受容するようになる。子供の死による痛みと悲しみは変わらないけれども、彼女はそれを受容できるだけの大きな器となって次の人生に踏み出したわけである。

話は時と場所を飛ぶが、阪神大震災で親や兄弟を失った子供たちのために、「あしなが育英会」が「レインボーハウス」を建てた。そしてその維持会員として「虹のかけはしさん」を募集している。その説明書に次のように言っている。

失った愛をうめるには「愛」以外、力をもちません。本当の親は生きかえりませんが、その分たくさんの人々のさりげない小さな愛が子らにふりそそげば、子らの心にポッカリアいた穴もすこしずつふさがり、傷ついた心も少しずつ癒されていく、と信じます。^(注2)

すなわち、肉親を失った心の傷は子供たちに残るけれども、人々の大きな愛が子供たちに、心の傷を乗り越えて自分の人生を歩む力を与えるのだと言っている。

2000年1月14日に、韓国の金大中大統領が朝鮮人民民主主義共和国を訪問したとき、晩餐会で大統領は次のように「癒し」という言葉を使った。

わが民族の近代史百年は試練の連続だった。民族の団結と近代化と言う歴史の要請に背を向けたことに原因がある。これからは互いに与えた傷をいやしい、平和と協力と統一の道を歩むべきだ。これが首脳会談の理由であり、歴史的使命だ。^(注3)

ここにおいて金大統領は、過去の歴史と現在の状況をそのまま認め、誰をも責めず、今の状態を出発点として、未来に向かって進み出すことを提案している。

このように「癒し」とは、その主体（上の例では、キサー・ゴータミーや震災遺児や南北朝鮮の人々）がより大きな器となって、悲しみや怒りを乗り越え、「今ここ」の現実から将来に向かって歩みをはじめめる状態を意味する。本稿では、この観点に立って私達が老いと死を乗り越えるとはどういうことであるか、を考えて行く。

3. 生と死の乖離

端的に言うと、現代文明では生と死の間に極端な乖離が起こっている。テレビで代表されるマスコミも、若さと健康と生を強調して、あたかも老いと病と死はあり得ないかの印象を与えている。物質的な豊かさを幸福の指標として、精神生活の面では、せいぜい心理的な「心地よさ」や「快適さ」を問題にする程度である。

しかしこれは現代に限ったことではない。『万葉集』に、「竹取の翁の歌」というのがある。竹取の翁が山に入っていくと何人かの若い女性たちが野原で昼食を作ろうとしていた。女性たちは翁に火を起こさせた後、「誰がこんな汚い老人を呼んできたんだ」と言って口論し始めた。そこで翁は次の歌を詠んだという。

死なばこそ 相見ずあらめ

生きてあらば 白髪兒らに 生ひざらめやも (16-3792)

(もし若くして死んだらそういうことはないだろうが、
もし長く生きれば、あなたたちも白髪のおばあさんになるだろうよ)

白髪し 兒らも生ひなば

かくのごと 若けむ兒らに 罵らえかねめや (16-3793)

(あなたたちも年を取って白髪のおばあさんになれば、
このように若い者たちにののしられるかもしれないよ)

(万葉集 竹取の翁の歌 巻16—3791) (注4)

仏典においても、釈尊が次のようにおっしゃっている。

愚かな凡夫は、みずから老いゆくもので、また老いるのを免れないのに、他人が老衰したのを見て、考え込んでは悩み、恥じ、嫌悪している。(中略) このことはおのれにふさわしくない、と言って。(中略)

愚かな凡夫は、自ら死ぬもので、また死ぬのを免れないのに、他人が死ぬのを見て、考え込んでは悩み、恥じ、嫌悪している。(中略) このことはおのれにふさわしくない、と言って。(注5)

これらの例でもわかるように、老いと病と死をできるだけ遠くに追いやろうとするのは古今東西変わりがない。人は幼少期には早く大人になりたいという欲求が強いが、中年になると、老いを避けたがり、老年期にはいと死を厭う。

ここで私達がどうして老いと死、特に死を厭うのかを考えてみると、それには次の理由が考えられる。

- (1) 生きている間は、死を体験できない。死は全く不可知の状態である。
- (2) 死には大変な苦痛を伴うともなう場合が多い。死に至る過程が恐ろしい。
- (3) 死後の自分がどうなるかがわからない。自己の無化が恐ろしい。

死をおそれるあまり、人々は古来さまざまな解決策を練ってきた。一つには、実際に不老不死を求めることで、秦の始皇帝が徐福というものを東海の島国に使わして不老不死の薬を求めさせたと言われている。またスメル人の「ギルガメシュ神話」では主人公が不老不死の仙薬を求めて森にはいるが、結局失敗する。次には、この世で不老不死が得られなければ、死後に生き続けることを確実にしようという試みで、古代エジプト人の宗教がこれにあたる。また法然以前の浄土教もこの傾向が強い。すなわち、この世は苦悩が多いから、死後には極楽という良いところで永久に生きたいという願望である。また日本の戦国時代の武士は、死後のことはわからないから一応考慮外に置いて、名前を後世に残すことによって生き続けようとした。さらに現在でも言えることであるが、生前にお墓や廟を造って、自己の存在を後世まで感じさせようとする人々もいる。しかしどれをとってみても、死に対して自我を主張しているにすぎない。このような試みでは、結局「死」が勝利するのである。

ここまで考えてきて気がついたことは、「死者は死なない」ということと「まだ生まれていない者も死なない」、ということである。一度死んだ人が再び死ぬことはないし、死者の死を心配する必要もない。少し前に小淵恵三首相が突然倒れたとき、その死が公表されるまでの数日間、多くの人が首相の病状に関心を持ったが、一旦その死が発表されると首相の「死」そのものは問題でなくなった。それと反対に、生まれていない者も、この世とは全く隔絶した世界にあるという点で、死者と同じ状態にある。

とすると、「死」が問題になるのは、「生」の状態にあるときであり、通常私たちが「死」といっているのは、生から死に至る過程の状態である。結局「死」は「生」の問題なのである。そうであるが故に、「私」の老いと死を問題にすることは、今の生をよりよく生きることにつながるのである。

4. 「私」にとっての老いと死と癒し

人々は死後の自分の状態をよく問題にするけれども、生まれる前の状態を問題にすることは少ない。しかし生まれる前の状態は、死後の状態と同じ重要性を持つ。どちらも生の本質に関連しているからである。『大無量寿経』に「独生独死独去独来」という言葉がある。「独り生まれ、独り死し、独り去りて、独り来る」。これが私達の生の本質である。私たちは、久遠劫の昔から、生まれ変わり死に変わり、迷い迷ってきたのであり、今幸いに人間

に生まれて、生の本質を見極めなければ、また死後も迷いの生に逆戻りするのである。

この經典の文はまた、現在の生の有様をも言っている。私に代わって生きてくれる人はいない。どんなに大勢の人に囲まれていても、私は独り。私の生も、私の死も、私独自のものであるが故に、死と和解し、死を受容することが、生を輝かせることにつながるのである。逆に言うと、他人も同じく二つとない命を生きているのであり、この言葉の真意は、一つ一つの命の尊厳を言っているとも言える。

最近の即物的な風潮では、死後の世界や、地獄・浄土のことを話題にする人は少なくなった。しかし、本当は自分の死後どうなるかということは、今の生活をどうするかという問題以上に重大である。それで次に地獄とはどういうところかを考えてみることにする。

平安時代の天台僧・源信僧都による『往生要集』は、文字通り浄土に往生するためのさまざまな道を述べているが、そのはじめに地獄のさまざまな様相を描写していることでも有名である。例えば地獄の入り口の等活地獄では、罪人が互いに鋭い爪で相手を切り刻み、血を啜り、肉を食って、ぼろぼろになる。または地獄の獄卒に身体を打ち砕かれて粉々になる。しかしすぐにもとの身体に戻されて同じ苦しみを間断なく繰り返す。より深い地獄は苦しみの度合いと期間が長い。^(註6)これから考えると、地獄とは、自我が徹底的に打ちめられるが、それでも自我が壊れない世界であり、しかも死にたくても死ねない世界である。私たちが本当に不老不死になって世間に生き続けられれば、やはりこのような状態になるに違いない。

これから類推して、仏の浄土とはどういうところかということ、自我が開放されて、生老病死の自然の理をそのまま受容できる者の生まれる世界である。老いるときは老い、病気の時は病気になり、死ぬときは死をそのまま受け入れる、そういう者が生活する世界だといえる。そこには老いの寂しさ、病気から来る身体的苦痛、死を迎えるにあたっての別離の悲しみ、は当然あるだろうが、それらの感情が怒りや貪りや執着を引き起こすことがない世界である。したがって浄土に往生する（往って生まれる）とは我執にまみれた穢土の生から、自我の開放された浄土の生への転換を言うのである。

ここで少し、もし自分が生まれていなかったら世界はどうであろうか、という問題を考えてみよう。私のこの場所には私がいなくて、別の人がここで話しているかもしれない。いま私の教えている学生も、ちがった人から異なった授業を受け、少しずつ異なった人生を歩むであろう。私の家内も別の人と結婚していて、全く別の子供がいるだろう。私が今まで関わってきた人々は、多かれ少なかれ今とは違った生活をしているであろう。

こう考えてみると、私たち一人ひとり、自分にとっても他人のとってもかけがえのない人生を生きていることがわかる。私たちはそれぞれ独立した人格を持ちながら、しかも互いに命を支えあい、関連しあって生きている。私たち一人ひとりが影響を及ぼす範囲は、実に全世界に及ぶのである。

そうすると私たちの自我とは一体なんだろうかという疑問がわいてくる。いくら「俺が、私が、僕が」と言って自我を主張しても、その自我自体が、他者の命に支えられているのであるから、確固不動の「自我」というのは妄想にすぎない。私たちの「自己」は本来開放されているのであるが、私たちがそれに気づかずに、自分で作りだした自我に執着しているわけである。釈尊の教えはこのことを指摘していると言える。

ここで、1903年から30年まで生きた薄幸の童謡詩人・金子みすゞの詩を一つ挙げることにする。

お魚（金子みすゞ）

海の魚はかわいそう。

お米は人につくられる。

牛は牧場で飼われてる。

鯉も小池で麩を貰う。

けれども海のお魚は

なんにも世話にならないし

いたずら一つしないのに

こうして私に食べられる。

ほんとに魚はかわいそう。(注7)

金子みすゞにとっては、全く代償を求めずに自己の命をもって他者の命を支えてくれる魚は、仏の化身と思えたのであろう。

この世から完全に姿を消して、あとに残るものに無償で自分の存在の場を明け渡すことになる死は、仏教的観点から言うと、最大の慈悲行であると言える。

5. 凡夫の往生

釈尊は、生老病死を人間の最大の苦だと教えられた。しかし生老病死は全く自然の理である。それを苦しめているのは、人間の我執であり、自然の理を自分のこととして受け入れようとしない無明である。私たちがこの自然の理を覚るために釈尊は八正道を設けてくださったのである。

それでも釈尊は、老いと死を悲しむ人間的な心まで否定されたわけではない。それどころか、老いと死に対する「癒し」は、自分の命を愛おしむ気持ちを大切にしながら、生老

病死の自然の理を覚るところに見出されるのである。釈尊もその最晩年、いよいよ自分の死期を覚られ、マガダ国から北へ向けて最後の旅をされたときに、ヴェーサーリーの町に来られて「アーナンダよ、ヴェーサーリーは美しい。ウデーナ霊樹は美しい。ゴータマカ霊樹は美しい。・・・」という言葉が言われた。さらにヴェーサーリーを去られるときには、「アーナンダよ。これが私がヴェーサーリーを見る最後の眺めであろう。」とおっしゃっている。^(注8) 釈尊は、自由の雰囲気があった美しいヴェーサーリーをこよなく愛されていた。真理に透徹され、執着を断たれた釈尊であるが、このように極めて人間的なお心をお持ちであったのである。

ここで、ペスタロッツ賞を受けるほどのすぐれた教育者であり、真宗僧侶でもあった東井義雄氏の詩を紹介しよう。

「老」を生きる身の上になってみて（東井義雄）

神戸の 全盲の六年生の男の子が

先生に

「そりゃ 先生 もし見えたら

まっ先に お母ちゃんの顔が見たいわ

だけど もし 見えたら ぼくなにか

あれも見たい これも見たいと

気が散って ダメになってしまうかもわからへん

見えんかて

別に どういうこともあらへん

先生

そりゃ 見えへんのは不自由やで

でも ぼく

不幸や思ったこといっぺんもあらへん

先生

不自由と不幸は 違うんやな。」

(中略)

その 全盲の六年生の子が教えてくれているように

「不自由」と「不幸」とは違うということに

目覚めさせていただく

姿・形を見る目は不自由になっても

「おかげさま」の見える目をいただく

そうなれたら

この「老」さえも
『老』のおかげさまで」という世界が
拓けてくださるのだ

それともう一つ
「死」が迫っている事実をごまかすことは
やめよう
この 自分でもいやになる
嫌われるのが当然の
こんな 私が
なお
祈られ
願われ
おがまれ
生かされ
赦されてある ということは
「どこまでも
見放すことはないぞ」という
願いがあるということではないか
その願いの主に
「死」をも
お預けしようではないか (注9)

この詩で東井氏はまず、全盲の男の子の「不自由と不幸とは違う」という言葉への感動を述べ、そこから発展させて「おかげさま」の見える目をいただくことの大切さを指摘する。東井氏はさらに、「おかげさま」が見えるということは、私たち一人一人にかけられている大きな願に目覚めることであり、その目覚めによって「老」も「おかげさま」と受け入れ、「死」をもその大きな願の主におあずけできる世界が拓けてくる、と言っている。

佛教に「凡夫」という言葉があるが、これは煩惱のおもむくままに喜怒哀楽の感情に振り回されて、自分の力では決して涅槃寂滅の世界に入ることのできない者を言う。こういう救われる可能性のない凡夫を救うと約束してくださったのが阿弥陀如来である。阿弥陀如来の願いの中では、私たちのすべてが肯定される。ここに究極の「癒し」がある。

『歎異抄』第九章に、親鸞が如来による凡夫の救いの有様を述べている文がある。

名残惜しく思へども、娑婆の縁尽きて、力なくして終る時に、彼の土へは参るべきなり。急ぎ参りたき心なき者を、殊に哀れみ給ふなり。これにつけてこそ、いよいよ大悲・大願は頼もしく、往生は決定と存じ候へ。

ここで親鸞の言おうとしていることは以下の通りである。如来が念仏する者を無条件に浄土に迎え入れてやると約束してくださったにも関わらず、私たちは念仏しても少しも救われる喜びを感じない。この苦悩に満ちた世界に執着して、早く往生したいと思わない。そして私たちは最後の一瞬までこの世の生にしがみつこうとするが、ついに力つきて娑婆の縁が切れたときに、浄土へ迎え入れられるのだ。このように急いで浄土へ参りたい気持ちのない者を、如来は殊に哀れんでくださる。だから、如来はそのような凡夫を救うと約束してくださったのであるから、念仏の有り難さを感じなければ感じないほど、如来の大悲・大願が頼もしくて、私たちの往生は疑いないことが知られるのだ。

私たちのほとんどは、「自分は死を恐れない」と大声で心の底から言えるような勇ましい者ではない。誰もが未体験の死をできるだけ先送りしたいと思っている。そういう自分をそっくり認めて受け入れてくださる如来に出会うことが最終的な「癒し」だと言える。

次に、因幡の源左という江戸末期の妙好人の言葉を引用する。

死にさへすれば糸、助ける助けぬは、仏様のお仕事だけ糸、こちらは、
死にさへすれば糸、．．．。(注10)

おそらく源左は、死んだらどうなるのか、救われるのだろうか、地獄落ちだろうか、などという質問を受けたのであろう。それに対する答えは、「死にさへすれば糸、」ということであった。これは仏に完全にお任せしている、信心の究極的な姿である。源左は死をこのように解決していたのである。

私が尊敬していた京都・浄住寺の住職・榊原徳草師が91才の時に、私が「人の命は今日あっても明日なくなる可能性を秘めていますが、統計上は91才というと、やはり若い者より死に近いようです。先生は、91才になられて、十分に生きたと思われませんか、それとももっと生きたいと思われませんか」という不しつげな質問をしたことがある。榊原師はにっこり笑って「本当はもっと生きたいんですけどね。でもあまり長く生きると、周りのものに迷惑をかけるからね。」とおっしゃった。何歳になってももっと生きたい、という気持ちはわからない。しかし後に残る者に苦勞をかけたくない、という慈悲の言葉に私は受け取った。

最後に、つい2週間前の本年6月に亡くなられた相愛女子短期大学の北谷幸册先生の言葉を味わって私の講演の終わりにしたい。

今、ここにこうして生きている私たちは、命あることの有り難さをかみしめて、生きているということに傲慢にならず、しっかりした目標を持って充実した生活を送ってゆかねばならないと思います。そうすることが、みんなにやがてやって来る壮年期・老年期へと繋がって参ります。間もなく迎えることになる二十一世紀は、一人ひとりが自分の命も人の命も大切にすると共に、思いやりを持ってお互いに安心して生きてゆける、そんな「心の世紀」であってほしいと願っています。^(注11)

注

1. 菅沼 晃『ブッダとその弟子 89の物語』（法蔵館）p.175。
2. あしなが育英会「虹のかけはしさん——ご説明と申込書」。
3. 2000年1月15日付朝日新聞朝刊。
4. 北谷幸册教授「生きるということ」
相愛大学・相愛女子短期大学宗教部編集『法輪11』p.60。
5. 中村元『仏典のことば』（岩波書店）pp.239,240。
仏典『アングッタラ・ニカーヤ3—38』からの引用。
6. 川崎庸之『源信』（中央公論社）p.56。
7. 金子みすゞ『童謡集』（ハルキ文庫）p.11。
8. 中村 元『ゴータマ・ブッダ 釈尊伝』（法蔵館）pp. 194, 196。
9. 東井義雄「『老』を生きる身の上になってみて」
東井義雄『老よ、ありがとう』（樹心社）pp. 164-181。
10. 『源左同行言行録』p.228。
11. 北谷幸册「生きるということ」
相愛大学・相愛女子短期大学宗教部編集『法輪11』p.63。